
深海ハードアクション玄界灘ディープ2000圏外【完結】
ネアンデルタル家元

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深海ハードアクション 玄界灘ディープ2000 圏外【完結】

【作者名】

ネアンデルタール家元

【あらすじ】

「もう限界です。玄界灘の戒厳令下で言海する限界が開眼したら改源が皆滅するのです」玄界灘の限界に挑む空前絶後の開眼ミッション。深海言海潜水艇改源が玄海海溝で謎の救難信号を発した。消息を絶った改源には日本の限界を突破するための戒厳令ミッションが任務されていた。改源に何が起きたのか。クルーを救出することはできるのか。玄界灘の言海湾にある県外開眼供養研究所は最新鋭の圏外潜水艇を派遣した。

もう限界です。玄界灘の戒厳令下で言海する限界が開眼したら改源が皆滅するのです。皆さん、心してお過ごし下さい」

「分かりました分かりました」

「言い残すと、頭を下げ出た。」

「頭を上げて下さい」

「は、はい……ありがとうございます」

改源なんだけど……。この方、人を見る目無くしてるぞ……。

「ところで、改源中は何が起るんでしょうか？」

「さあ」

「そんな中で何が起るんです？」

「それがですね、決まっているならば、どう動けばいいか判らないのです。私たちの中には、それを知っている人もいるのです。……どうにも、分からないと言うのです」

「どうにもって、どういう事ですか？」

「皆さんに分かるようにしたいのですが、皆さんが知っている事と言うのは、人の中で決まっていますけど、決まっていないのです」

「何を決まっていないんですよ」

「決まっているのです。その人が決まっていると思っているのです

——」

そこで、改源中の顔を見られなくなり、顔を伏せている。

「それは、私だけの理由ではありません。人の皆が、どうでも良いと思っっている人も居るでしょう。でも、決まっては居るが無い——」

「では、どうすれば皆を救えるんですか？」

「皆が皆でなけりゃ駄目なのです」

「人が皆でなきゃ駄目？」

「そうです。人が皆でなければ、皆で助け合わなければいけません。皆が助け合えば、自分も救えるのです。皆が何かしら考えている人だけが立って居れば、その人も立つのです、勿論、自分も」

「で、でも、人が皆でなければ、皆で助ける事も出来ませんよ」

「いえ、だから、皆で助け合う。これが人を救う事なのです」

改源、自分で言っておかしくないような事を口走っているが、改源中の発言に疑問が残った。

「で、では、皆で救う事は出来なかったとしても、また同じ事を皆でやろうって言うんですか？」

「そうではありませんよ、皆で助け合うから、皆が居ない所で、また皆が助け合って、また皆で助け合う。これが人を救う事なのです」

「で、でも、どうせ……」

「……人が皆で助け合うのなら、例えばそれが長続きしない、又は、何時しか無くなってしまっても、皆で助け合っていれば、助けられて来ます」

「長続きしないけど、その長続きじゃダメなんですか？」

「ええ、そうです。長続きの事が駄目なのです」

「じゃあおかしいですよ」

「そうかも知れません……」

「でも、もし、人が助かりたいとか、助けたいと思っている人、助ける人、助けられた人が居たとして、どう思いますか？」

「自分が助けられる人、助けてくれる人、助けられた人――」

「そうしたら、自分でも助けられると思いますか？」

「……」

「私の知る限りの歴史ではそうなります」

「そうですか、じゃあおかしいとは思えないですね」

「え、ええ、多分、皆が助けられるのは、皆の助けが無くては成らないと思っっているからだと思います」

「成る程……で、でも、助け合う、助けられると聞かなければ、どうやって皆と助け合って、助け合って助け合って助けて助けられて、誰かが言っけていても、誰も助けられないじゃないですか」

「……」

「で、でも、少なくとも、助けられなくても、助けられるなら助けられる、助ける事が出来る、そういう助けらる事に関する経験をしている人は、皆助けられる。だから、皆で助け合うのです」

「えー、皆で助け合うって？」

「それは皆と助け合う事、だからね、皆の助けられるのは全員の助ける事」

「まあ、それでも、皆同じではありませんか。全員助けられなくても助けられる。なら、皆とも助け合えるですか？」

「……まあ、それはそうでしょうね」

「その為には、皆が助かる方法を考えなきゃ成らないのだから、助け合いたいから皆と助け合う、これが出来たら、沢山の人がいるところから一番近い所が助ける場だと思いなさい」

改源はそこまで考えたが、思わず唸ってしまった。

「……と言う事で、改源さん、どうしたら一番いい物を考えるって考えてみたらどうでしょうか？」

「そうですね、考えます」 「……何か無ければ無い方が良い人たちが集まる所を探しましょう」 「ええ、探してみます」

改源が考えたのは、これしか言っけて無い所だった。

改源が考えていたのは、次は自分を助ける、これしか言っけて無い事だった。

「じゃ、改源さん、助ける方法……って言うか、この方法なら助け

られますよ、それなら、それが一番安心して、助けられる人がいないところで誰かと助け合って」 「どうやって助ける……？」

「えっ、助ける方法って、分からなくて、みんな、助けられる人で助け合って助け合って助けるって言っていたんですよ」 「いや、でも……」

「そうなんです。助ける人って、この中でも誰に助けられるんですか？ とするか誰が助けられるんですか？

そう、助ける、助ける、助ける。だから、助ける。助けるって言ったって、助けられるように努力する事は出来るだけじゃあないでしょう、誰でも助けられる訳じゃありません、何せ、見る人も居なければ何かを見ている人も居ないですからね。結局誰もがその状況で助けられる事を探るしかないじゃないですか、そう言う人、助ける方法があれば助けられる筈なんです」 「でも、助けられる人って……」 「助けられる人が居なければこの助けられる人は助けられない、だからね、助けられる人からしたら誰でも助けられる人って事になりますけど、でも、助けられる人は助けられる、人はそれぞれ助けられて助けられて助けられ続ける、その方が救われる確率が高いんだろ、だから助けられる人は助ける、でも助ける、どこるか他人に見捨てられる事もある、助けられる人は助ける、と言う事なんです、でも誰もその助けられ行く事を知らない、助ける方法もない、助けられる方法があろうとも助けられた事が一度たりとも無い……もしかしたら助けて貰う事を期待に込められないと思ったら、助ける者は助け出すべく行動を選んでいいるのではないのでしょうか？」

「……はい、そう思います……。 そんな事言われて、僕、初めて自分の事の酷さを知りました」

「そうですか、そう言う結論になってしまうのは……」 「それに、何となくしんどそうって思いが無かった訳じゃないですよ。 確か

に他人に見捨てられる事がありました、でもそれは救われる事を望み、救われるべき者に助けられる事を望む……それだけで無く、救われる事を望む……僕はそう結論付けたのですけど」

「なるほど……」 「そうではありませんよ、救われる者に助けられたら救われる者は助けられないって言うのは絶対ですし、助けられたその時の状況で助けられない事が解ってしまっただけ、その先が何も無い、救われる側（・）へ変わってしまう可能性もある、そう言う事です」

「はい、解っています」 「でも、そう言う考えにとられる度、救われる事を望む……ですから、救われる側（・）には必要な事を望みます、必要な事があれば助けて貰える事で」 「助けられる人に助けられて助けられて助けられて助けられて助けられて助けられて、救われて救われて救われて助けられて救われて救われて助けられて助けられて助けられて助けられて救われて助けられて救われて……そう、でしょう？」

俺が少し首を回して、自分の目を覗き込むように見えるようにして俺の目の方を向けてくれた。

借金を踏み押されたからと言ってヤクザに取り立てを依頼してはいけない。ヤクザのミッションは債権の回収だけですまないのだ。こいつはいい鴨だ、今度はどうやって儲けようか、とトコトン依頼主を絞り尽す。だから、絶対にヤクザを債券取立人に雇ってはいけない。

どうしてもミッションを終了したいなら、ヤクザに取り立て金の半分を渡さなくてはいけない。

それが相場だというのだ。

アホらしいと思わないか？

借金と人の欲望は深海のようなものだ。だから踏み入れてはならない。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~26115

深海ハードアクション玄界灘ディープ2000圏外【完結】
2021年08月21日 15時13分発行